

城北会千葉支部会誌

第1号

平成16(2004)年11月

城北会千葉支部

発刊の挨拶

この度、城北会千葉支部会誌を刊行することになりました。ここにお送りいたします。

この小誌が会員の親睦に役立てたら作業に携わった者一同それを喜びといたします。

私は支部会に参加するようになってから、毎回事務局が用意してくれる会次第や欠席者自身による近況報告の一覧等（初期は手書きのガリ刷り）は会の軌跡として保存できたらよいと考えていました。ことに毎回の同窓生にお願いしている講演は平易に話されますが、講演者が携わる領域における精華であり、一卷の書物に匹敵する内容です。その場限りのものにしてしまうのは真にもったいないと思いました。講演は文字になれば当日参加できなかった会員にも配布できるだろうし、直接聴いた人も再度楽しむことができます。これらのことがいつも頭にありました。

支部長になってから、支部会誌作成を幹事諸氏に話したところ皆賛成でした。また当初の情報では、年1回の支部会が開催されるようになってから2004年は20回目になるということで、支部会20回記念に第1号を刊行しようということになりました。しかし、新たな資料によると第1回は昭和58(1983)年であったことが判明しました。従って2004年は、毎年举行されたとして、22回目、21周年になるのです。しかもそれは**新生千葉支部総会**で、元来の千葉支部は昭和42(1967)年に発足し、昭和43(1968)年に総会を開いていたのです。これらのことは遡って城北会誌をみていくうちに明らかになってきました。ともかく作業にとりかかり、ようやく出来上がった次第です。

内容に関しては遡って会の歴史をたどること、講演はまず当年度のものを掲載し、以前のは講演者の了解のもとに逐次掲載することを話し合いました。

また、我々卒業生は、今日社会人となって日々を過ごしていますが、振り返って府立四中時代、戸山高校時代に受けた教育の理念や当時の学生生活を思い出すことも何かの役に立つのではないかと考えました。そこで、教育理念や先生方のプロフィール、学生時代の思い出などは長老先輩から順にインタビューして収録することにしました。

今の時点では先ず第1号の刊行が目標で、スタイルも内容も不揃いですが、歩き出してしまえば自ずと充実していくものと確信しております。また会員からの寄稿は話題、形式を問わず、大いに歓迎です。

会員各位とともに城北会千葉支部の充実と支部会誌の継続を祈ります。

平成16(2004)年11月

城北会千葉支部

支部長 齋藤和子

1. 城北会千葉支部の歴史

(1) 発足から今日までの経緯

千葉支部第1回総会は昭和43年

「城北会誌」の掲載記事をたどると、「千葉支部発足」の最初の記事は昭和43(1968)年5月1日発行の“号外”にありました。それによると、“昨年(昭和42、1967)11月25日、船橋駅前西武百貨店地下レストラン三幸に有志13名が、城北会会長代理鈴木定夫氏を迎えて発起人会を開き支部を結成したこと、今年2月25日に同所で創立総会が開かれた”とあります。支部長：川村秀文(大5)、幹事：田寿郎(昭7)、高浦敏明(昭9)の2名です。

次いで「城北会誌 16号 昭和43(1968)年12月」に「城北会千葉支部創立総会の記」が幹事田寿郎、高浦敏明両氏の名で載せてあります。まず発起人総代川村秀文氏から支部結成の趣旨が述べられ、ついで世話人から支部結成後の経過報告があり議事に入りました。

議事の第1は支部規則で世話人提出原案通り可決され、第2は役員人事で、支部長：川村秀文(大5)、幹事：田寿郎(昭7)、高浦敏明(昭9)の2名が承認されました。

当時千葉在住城北会員は約200名で、すべてに案内を送っていますが当日参加者は21名でありました。出席者に大槻氏、篠塚氏、寮氏等の名があります。

従って城北会千葉支部第1回総会は昭和43(1968)年2月25日、船橋駅前西武デパート内レストラン三幸においてということになります。

第2回総会は昭和47年・船橋商工会議所にて

第2回は昭和47(1972)年11月11日となります。場所は船橋商工会議所。

「城北会誌 20号 昭和47(1972)年12月」に記事があり、それによると、“城北会千葉支部は去る昭和42年に結成され、翌43年創立総会を開催したがその後機会を得ないでいたところ、たまたま昨年城北会の新しい名簿ができたこともあり、今年はぜひ総会を開くようにとの有志のお励ましもあり、・・・”開催の運びとなったとあります。

支部長には川村氏に替わって大森寛氏(大14)が選ばれています。参加者21名。

また北村民主子氏(昭41女性)の参加が“嬉しい傾向”と特記されています。

第3回総会は昭和49年・船橋商工会議所にて・戦時の体験談など

第3回は昭和49(1974)年10月26日、場所は船橋商工会議所。支部長：大森寛氏。

「城北会誌 22号 昭和49(1974)年12月」によると出席者15名。三宅次郎氏の名があります。参加者の自己紹介で、三好恒氏(大3)から終戦直前、海軍士官として外地におられたが、艦船、飛行機を全く失っていた悲況の中で任務を全うされた苦心談、大森支部長からは四中時代の居残りのこと、三代川英雄氏(昭19)からは四中時代は勉強でぎゅうぎゅういわされ先生方が鬼のように思えたが、海軍兵学校に進んで独特のシゴキにあり、四中時代の先生が仏のように思えてきたとの懐旧談等が紹介されています。

なお城北会誌 23 号には「千葉支部の近況」が掲載されています。「明年吉日をトして第 4 回支部総会を開催する計画」とあります。

第 4 回は昭和 51 年・市川市中央公民館にて・古賀、柴田両先生が出席

第 4 回は昭和 51 (1976) 年 11 月 20 日 場所：市川市中央公民館 支部長：大森寛氏。参加者 25 名。「城北会誌 24 号 昭和 51(1976)年」に「支部の近況」として報じられており、「城北会誌 25 号 昭和 52(1977)年 12 月」には 2 ページにわたって記事があります。出席者の中に旧師として古賀米吉、柴田治の両先生の名があります。

この第 4 回支部総会のスピーチでは、両先生のご在職中のお話に続いて、会員から、昨今の学生の基礎知識の貧困さを嘆く言葉が述べられています。また参加者に戸山高校になってからの会員があったことに、“心強い限りである”と書かれています。

千葉支部復活への動き

その後、城北会誌 26 号(1978)、27 号(1979)、28 号(1980)、29 号(1981)の各号には千葉支部に関する記事は掲載されていません。

前回の記事から 5 年後の「城北会誌 30 号 昭和 57(1982)年 12 月」に田寿郎氏(昭 7)による記事があります。

その中で、千葉支部は現在復活再編成の準備中であるとしてその経過が述べられています。それによると昭和 57(1982)年 2 月 28 日、千葉支部再編についての有志グループが成田日航ホテルで会合し、そこでの方針に基づいて昭和 57(1982)年 8 月 1 日に世話人会が千葉市ニューナラヤ内浜田家で開催されています。

また次回世話人会を“10 月末～11 月上旬に開催予定”とあります。

昭和 58 年・新生千葉支部第 1 回総会

昭和 58(1983)年 6 月 1 日発行の「城北会誌 号外」に「千葉支部復活総会」が同年 3 月 6 日(日)に千葉駅前そごう別館 8 階コックドールで開催されたとあります。世話人代表の田氏から支部の歴史、復活準備のための世話人有志の会の経過が報告され、田氏が支部長として承認されました。

城北会誌 31 号 昭和 58(1983)年 12 月」には「城北会千葉支部報告 千葉県在住(在勤)会員の皆さんへ」と題する田寿郎氏による記事があり、「号外」のように、3 月 6 日**新生千葉支部の第 1 回総会**が開かれたこと、および今後の予定と運営方針が述べられています。

それによると、

- (1) 第 2 回(昭 59, 1984 年)は 2 月 26 日(日)そごう別館コックドールで開催予定。
- (2) “支部は組織をより強化し、連絡を緊密にしうるよう次のグループに分け、それぞれ幹事を選出した”とあります。

- A. 医師グループ (A' を除く)
- A'. 医師グループ (千葉大学医学部関係者)
- B. 千葉大グループ
- C. 航空関係グループ
- D. その他グループ

とし、各々2～3名の幹事を選任しています。

しかし後の号でこれらのグループの行方について触れているものはありません。

同じ「城北会誌 31号 昭和58(1983)年12月」に田寿郎氏の「健康談義」が掲載されています。それによると田氏は前年1982年に胃のポリープを発見され、“11月には城北会千葉支部の総会を開かねばならないし・・・”、しかし延期することにし、入院、治療した。そして“あれから1年近く、後遺症もなく・・・”、“私の病気で遅れたが**新生千葉支部も3月はじめに総会を開いた**”とあります。

同じ号に同じく田氏により「恩師古賀米吉先生の死を悼む」の寄稿があり、そこに“今春、千葉支部発足に際してぜひご出席をとお願ひしたが・・・”とあります。

矢野幸男氏(昭18)の記憶によると、田氏が高浦氏から後事を託されて第1回千葉支部総会を昭和58(1983)年に招集したということです。

昭和59年・新生千葉支部第2回総会

■ **新生千葉支部第2回総会**は昭和59(1984)年2月26日(日)千葉駅前コックドールで開かれました。「城北会誌 32号 昭和59(1984)年12月」に田支部長による報告が掲載されています。出席46名、四中・戸山の比率は略半々、はじめて女性2人が参加したこと、千葉県内在住の会員が600名以上になっていること等が記されています。また「月例会」が発足し、毎月第2土曜日に千葉市の居酒屋、“名前はいささか上品ではないが”「赤ふんどし」で気安く集まっているとあります。

■ 第2回総会についてはパンフレット「千葉支部第2回総会報告：城北会千葉支部長 田寿郎；昭和59(1984)年3月31日」を矢野幸男氏が保存しておられます。同報告の冒頭の部分をここに転載します。

「第2回千葉支部総会は、去る2月26日(日)千葉駅前“コックドール”にて開催された。別紙のとおり、昨年の倍以上の50名近くの出席があり盛会でした。顔馴染の常連の他、新顔特に戦後派の戸山組も多く、女性会員の出席もあり、今後の発展を約束するものとして心強く感じました。」というものです。

盛会だったようです。

新生第3回以降は毎年定期開催

■ 第3回総会に関する記事は城北会誌32号の報告の最後に予告案内として日時：昭和60(1985)年2月17日(日)、場所：千葉駅前そごう別館8階“金閣”とあります。

「城北会誌 第33号 昭和60(1985)年12月」には千葉支部に関する記載はありません。予告案内通り実施されたものと考えます。

第4回総会に関する記事は「城北会誌 第34号 昭和61(1986)年12月」に田氏による「城北会千葉支部総会」があり、それによると、千葉支部第4回総会は昭和61(1986)年3月30日(日)正午から、国鉄千葉駅ビル5階のペリエ・ホールで開催されたとあります。来賓として本部から鈴木定夫副会長(昭和9)、会員で長田裕二参議院議員、矢野俊比古参議院議員、大槻清彦氏(昭11)、矢野幸男氏(昭18)等の名があります。

第5回総会については「城北会誌第35号 昭和62(1987)年12月」に大槻氏が寄稿しています。それによると、「今年の総会は田支部長が健康を害され、月例会のメンバー3人によって開催の運びとなり、大槻臨時幹事のもとに実施された」とあります。すなわち、第5回総会は昭和62(1987)年3月15日(日)、千葉駅前そごうダリアサロンで開催されました。出席者17名です。急遽代行による開催であったこと、転勤等で宛先不明があったりで次年度へ向けての情報収集の必要を感じ、加えて開催日が日曜日で大安ということで参加者が減ったと反省しています。来賓として本部から堀川富太郎会長(住友建設社長)が出席され、矢野俊比古氏(参議院議員)から売上税など税制問題についてスピーチがありました。

昭和63年度からは回数表記でなく年度表記に

第5回までは総会を第〇回と回数で表記していますが、次回からは開催年度を頭につけて表記しています。

「城北会誌 36号 昭和63(1988)年12月」には大槻氏により「昭和63年度城北会千葉支部総会」として報告があります。日時：1988年3月13日(日)、場所：そごう2号館8階ダリアサロン。

それによると、健康を回復された田会長の提案で役員交代が図られて承認されました。新体制は若返りと合議運営を目的とするとあります。役員は会長大槻清彦、副会長に篠塚和夫(昭13)、矢野幸男(昭18)の2氏、幹事に三宅次郎(昭20)、花岡英弥(昭26)、古河洋(昭30)の3氏、田前会長は顧問としてお迎えすることが全員の拍手で承認されました。

平成元年にはビール工場見学

平成元(1989)年の千葉支部総会の記事は同年5月20日発行の「城北会誌 号外」に「千葉支部総会の記——サッポロビール千葉工場で賑やかに開催——」とあります。日時は3月12日(日)。記事には、「大槻氏が新支部長に就任し、従来の停滞を打破し大きな飛躍が期待された。その第一歩として千葉駅周辺で開催していた総会を、船橋の海岸に新装なったサッポロビール千葉工場で開催することになった」とあります。当日の天気は絶好の快晴。正午に京成駅に集合、特設バスで工場玄関到着。コンパニオン嬢の案内で工場見学。

出来たてのビールで乾杯、そのあと飲み放題というわけで賑やかでした。本部からも理事諸氏が参加し、会員も昭和4年卒から60年卒の千葉大現役生まで、女性も7人参加したとあります。私（齋藤支部長）もビールに釣られて、初めて支部会に出席したのですが大歓迎を受け、楽しく気持ちよく、以後参加するようになったのです。この年の「城北会誌 37号 平成元（1989）年12月」の「千葉支部だより」には総会の記事は無く、毎月第3土曜日の月例会の様子が書かれています。“異なる分野の方々との付き合いはいろいろと情報が聞かれ、知識の泉である。フラッと出かけください。”と広告しています。

平成2～7年度は船橋・三田浜楽園にて

平成2年の総会の記事も「城北会誌 号外 平成2年5月10日」にあります。日時は3月11日（日）、場所は船橋市役所前の「三田浜楽園——昔の塩田の跡——で、参加者49名です。神谷城北会長の挨拶、最長老の清原氏（昭4）の音頭で乾杯。3分間スピーチで柏倉氏（昭27）、田氏（昭7）、重松氏（昭18）、寮氏（昭20）、小池氏（昭25）、山田峻一氏（昭27）、尾崎氏（昭31）等が在学中の思い出等を話しました。

同年発行の「城北会誌 38号 平成2（1990）年12月」には「千葉支部だより」として「千葉支部浦安会発足」の記事が村田氏（昭27）によって書かれています。発会式兼第1回会合が平成2年8月5日に開催され、会長に金尾氏（昭11）を選びました。

平成3年度には千葉大名誉教授多湖輝氏が講演

平成3年の千葉支部会の記事は「城北会誌 号外 平成3（1991）年5月15日」にあります。日時は3月17日（日）、場所は船橋市三田浜楽園。この会からゲストによる講演がプログラムの一つになってきました。千葉大名誉教授多湖輝氏（昭18）から、“ご自身の体験に基づき退職後の精神的対応を中心に”講演があり、若い人々にも大変参考になったと思うと大槻氏が書いています。

「城北会誌 39号 平成3（1991）年12月」には千葉支部会の記事は無く、「千葉支部だより」として第3回城北会千葉支部浦安会が7月13日（土）に開かれたことが奥村哲子氏（昭39）によって報告されています。会場はベイシテイ・ドルチェで、大槻千葉支部長、金尾浦安会会長（昭11）、塚本同副会長（昭25）はじめ12名が近況を報告し、交歓の時を過ごしたとあります。

平成4年度には矢野俊比古氏が講演

平成4年の千葉支部総会の記事は「城北会誌 40号 平成4（1992）年12月」にあります。日時は3月15日（日）、場所は船橋市の三田浜楽園。講演は矢野俊比古氏（昭16）で、幕張メッセ運営のポストに着かれたのでメッセについての情報を話されています。他に松澤医師（昭33）がスライドにより人の脳の働きを説明し、ストレスとの関連を話しています。参加者最年長の野上氏（昭6）が近くアルプスへ出かけるということ、石川木更津市長（昭

15) が東京湾横断道路の完成に期待していること等について話されました。参加者 50 人、うち“女性陣 5 名と今までになく多数で、会場は一層明るくなり、これからもっと多く参加してほしい”等、2 ページにわたって大槻会長が書いています。

平成 5 年度には東洋エンジニアリング社長・上床珍彦氏が講演

平成 5 年城北会千葉支部総会の記事は「城北会誌 号外 平成 5 (1993) 年 5 月 1 日」にあります。日時は 3 月 14 日、場所は船橋三田浜楽園。講演は東洋エンジニアリング社長の上床珍彦氏 (昭 19) で、エンジニアリングの解説、この分野の内外の状況、最近の浄化事業等の話をされています。参加者 37 人。

「城北会誌 41 号 平成 5 (1993) 年 12 月」には「千葉支部だより」があり、そこに会長の大槻氏が“千葉県には約 800 名の会員があるが転勤、転出もあり、会員の把握が十分出来ない”と述べています。また、“今年物故された前支部長の田先輩が開かれた月例会・・・”の記載があり、城北会新生千葉支部設立に貢献された田寿郎氏 (昭 7) がこの年逝去されたことがわかります。

平成 6 年度には寮甦三郎氏が相続税について講演

「城北会誌 第 42 号 平成 6 (1994) 年 12 月」には尾崎英二氏 (昭 31) による「千葉支部だより」の記事があります。それによると平成 6 年城北会千葉支部総会は 3 月 6 日 (日) 船橋三田浜楽園で開催され、講演は税理事務所所長の寮甦三郎氏 (昭 20) による「相続税について」で、“参加者一同耳を傾けました”とあります。

また役員が新しくなり、支部長：三宅次郎 (昭 20)、副支部長：尾崎英二 (昭 31)、会計担当：清末昌宏 (昭 20)、庶務担当：寮甦三郎 (昭 20)、相談役：大槻清彦 (昭 11)、矢野幸男 (昭 18) という体制となりました。

平成 8 年度は城北会総会と同時開催

「城北会誌」第 44 号 平成 8 (1996) 年 12 月に千葉支部会について三宅氏が寄稿しています。それによると、平成 8 年度の千葉支部会を城北会総会と同時開催したこと、参加者が例年より少なく、やはり千葉支部は千葉で開催すべきだと反省したとあります。

* 「城北会誌」第 45 号以降も、各号に千葉支部の報告が掲載されていますが、ここでは割愛させていただきます。

(2) 歴代支部長

昭和 43(1968)年～昭和 44(1969)年 川村 秀文
昭和 45(1970)年～昭和 57(1982)年 高浦 敏明
昭和 58(1983)年～昭和 61(1986)年 田 寿郎
昭和 62(1987)年～平成 6(1994)年 大槻 清彦
平成 7(1995)年～平成 8(1996)年 三宅 次郎
平成 9(1997)年～平成 11(1999)年 山田 峻一
平成 12(2000)年～平成 16(2004)年 齋藤 和子

(3) 新生千葉支部総会の経過

第 1 回総会 昭和 58 (1983)年 3 月 6 日 (日) 支部長：田 寿郎
場所：千葉駅前そごう別館コックドール

第 2 回総会 昭和 59(1984)年 2 月 26 日 (日) 支部長：田 寿郎
場所：千葉駅前 コックドール

第 3 回総会 昭和 60(1985)年 2 月 17 日 (日) 支部長：田 寿郎
場所：千葉駅前そごう別館 8 階 “金閣”

第 4 回総会 昭和 61(1986)年 3 月 30 日 支部長：田 寿郎
場所：千葉駅ビル 5 階 ペリエ・ホール

第 5 回総会 昭和 62(1987)年 3 月 15 日(日) 支部長：田 寿郎〔欠〕
場所：そごうダリアサロン 1 号館 7 回 (大槻臨時幹事)
スピーチ：矢野俊比古参議院議員「売上税など税制について」

* 第 5 回まで回数で表記、以後は年度表記に切り換えたが、ここでは過去とのつながりをつけるため、6 回以降も回数表記にした。

第 6 回総会 昭和 63(1988)年 3 月 13 日 (日) 支部長：大槻 清彦
場所：そごう 2 号館 8 階ダリアサロン
田支部長の提案で役員の交代が図られ、新体制となった。
会 長：大槻 清彦
副会長：篠塚 和夫、矢野 幸男
幹 事：三宅 次郎、花岡 英弥、古賀 洋
顧 問：田 寿郎

第7回総会 平成元年(1989)年3月12日(日) 支部長：大槻 清彦
場所：サッポロビール千葉工場 工場長：八東大三氏(昭30)

第8回総会 平成2(1990)年3月11日(日) 支部長：大槻 清彦
場所：船橋・三田浜楽園
ショートスピーチ：柏倉 信夫他
メモ：月例会 第3土曜日；奇数月「どん兵衛」(千葉駅西口)
偶数月「やはた茶屋」(本八幡南口)とする。

* 1990年8月5日に「千葉支部浦安会」発会式、兼第1回会合が開かれている。
会長：金尾氏、(大槻氏来賓)

第9回総会 平成3年(1991)年3月17日(日) 支部長：大槻 清彦
場所：船橋・三田浜楽園
講演：多湖輝千葉大名誉教授
*講演はこの年初めての試みとある。

* 城北会誌 39号 平成3(1991)年12月に、同年7月13日(土)に「第3回城北会千葉支部浦安会」が開かれたとあります。

第10回総会 平成4(1992)年3月15日(日) 支部長：大槻 清彦
場所：船橋・三田浜楽園
講演：矢野俊比古 幕張メッセ運営について
松澤氏(医師) 脳の働きとストレス
石川木更津市長 東京湾横断道路完成について
*奥村哲子氏 女性代表で挨拶

第11回総会 平成5(1993)年3月14日 支部長：大槻 清彦
場所：船橋・三田浜楽園
講演：上床珍彦氏(昭和19)
東洋エンジニアリング社長

第12回総会 平成6(1994)年3月6日(日) 支部長：大槻 清彦
場所：船橋・三田浜楽園
講演：寮 甞三郎(昭20)；「相続税の常識」

- 第13回総会 平成7(1995)年4月16日(日) 支部長：三宅 次郎
場所：船橋・三田浜楽園
講演：宮部 義一；「リストラについて」
- 第14回総会 平成8(1996)年6月12日 支部長：三宅 次郎
* 城北会総会と同時開催
場所：私学会館 アルカデア市谷
- 第15回総会 平成9(1997)年10月25日 支部長：山田 峻一
場所：三田浜楽園
ショートスピーチ
- 第16回総会 平成10(1998)年5月30日(土) 支部長：山田 峻一
場所：サッポロビール千葉工場
- 第17回総会 平成11(1999)年6月12日(土) 支部長：山田 峻一
場所：市川グランドホテル
講演：齋藤 和子(昭29)；「介護保険導入と健康の自己管理」
- 第18回総会 平成12(2000)年6月17日(土) 支部長：齋藤 和子
場所：市川グランドホテル
講演：坂元 直子(昭33)；「キレル子供の背景」
- 第19回総会 平成13(2001)年10月21日(日) 支部長：齋藤 和子
場所：八幡会館
講演：青木 利晴(昭32)；「インターネットの浸透で産業が変わる」
- 第20回総会 平成14(2002)年10月26日(土) 支部長：齋藤 和子
場所：八幡会館
講演：栗本慎一郎(昭35)；「人の進化と最終の病(血管)についての報告」
- 第21回総会 平成15(2003)年11月8日(土) 支部長：齋藤 和子
場所：八幡会館
講演：平本弥星(昭46)；「囲碁と日本文化—歴史が見える、未来が見える」

第22回総会 平成16(2004)年11月6日(土)

支部長：齋藤 和子

場所：八幡会館

講演：森岡 恭彦 (昭24) ; 「わが国における外科の曙」

2. 城北会千葉支部の黎明期

— 大槻氏、矢野氏とのインタビューから —

1. 千葉県の四中同窓生の集まりは、昭和40年代に田寿郎氏が呼びかけたのがそもそもの始まりだ。

2. 昭和59(1984)年4月29日に、第2土曜日に集まりたいと言ってきた。

6月9日に「赤ふんどし」に集まった。

6月23日が「総会」のはず。

—篠崎氏のところで準備した。興銀の上でもやった。そのとき及川氏が世話役をやった。

—大槻氏の同期の人が4、5人いた。

3. 支部長は大槻氏が3代目。

4. 当時のリーダー：

—上床氏(東洋エンジニアリング)のとき船橋・三田浜楽園で集まった。交渉は大槻氏。

—その前にサッポロビール千葉工場で行った。工場長：八東大三氏(昭30卒)

—多湖氏が講演した。

5. 田寿郎氏について。

—小見川の人である。その頃(昭和7年頃)近くに中学はなく、銚子商業があった。中学は千葉にあった。しかし一部の子弟は四中に入った。篠崎氏もそうだ。他に木更津の石川氏。

—田氏は三菱商事を定年で退職した。

戦争で腹に貫通負傷。優秀な人だった。田氏の話は金尾氏が知っている。(金尾氏は東京三河島の出身。現在浦安。)

6. 千葉城北会の性格：千葉の裕福な家の子弟が四中に行った。郷土の子弟。この人達の存在が千葉城北会をやろうという気運をつくった。(親達も土地のリーダー、キーパーソンだった。)

*このことが他の支部と違う点だ。

7. 大槻清彦氏の話

—昭和11年四中卒。

その年2月に「二・二六事件」。卒業の前だった。市ヶ谷のところで止められた。しよ

うがなく家に帰った。何が起こったのかわからなかった。

—学校では先生はそのことには触れなかった。

* 当時の四中卒の進路——東條英機は2年中退で幼年学校へ行った。総理大臣になって四中卒業名簿に入れた。幼年学校進学は当たり前のコースだった。

幼年学校に入るか、4年になって海兵（海軍兵学校）又は陸士（陸軍士官学校）、あるいは高等学校に行くかの選択だった。当時一中は文系、四中は理科系ないしは軍人の系統の学校といわれた。

—配属将校の関中佐を兵器庫（軍事教練用の三八歩兵銃等の格納庫）に閉じ込めた。

（みつかつて）そこにいた学生は6時頃まで残された。しかし、皆“知りません、知りません”と言って、だれも口を割らなかった。（懲罰で）残された子供の親には（事情を）ガリ刷りで持たせた。

関中佐は二〇三高地で負傷、指が伸びない敬礼しかできない。普通、中学クラスでは佐官は配属将校にはならないが、どういう加減か四中には佐官が来ていた。関中佐の後任には一時期尾家という少佐が来ていたが、昭和16年頃来ていたのは佐藤という少尉だった。他の中学では佐官ではなく尉官だった。

—クラス分けの話。成績順にクラス分け。甲、乙、丙、丁、戊。100人が甲、乙のどっちかに、あとの残りは丙、丁のどこかに入る。1、2年は同じ組。3年で組替え。4年は1組分くらいが軍に行ってしまうので、甲・乙、丙・丁の2組になる。

8. 大槻氏、インパールの話

—東大農学部を卒業し、農林省に就職後、召集されてインパールへ行った。インパールはインドの東端で、ミャンマーとの国境近くにある都市。第2次大戦末期に日本軍が進攻しようとしたが、イギリス軍に阻まれ撤退した。

—大槻氏の所属は宇都宮第33師団。昭和18年、幹部候補生の研修を受けて宇都宮に戻ると、3日目に指令が出た。ただ一人東京へ行けという。「その先は東京へ行ってから連絡する」という。東京に着くと、次ぎの出発は午後3時だという。居合わせた二人が「お前、東京を知っているのか」というので、「東京生まれだ。銀座はあまり知らないが、100回くらいは行ったことがある」といってやると、「それなら案内しろ」というので、あちこち昼食をとって2時頃まで案内した。3時の汽車に乗り、告げられたとおり下関に向かった。夜行列車に一晚揺られて、翌日午前11時頃に下関に着いた。午後3時集合というので昼食をとって戻ってくると、いよいよ乗船だ。行き先はまったく告げられていない。船中も誰も知っている者がなく寂しい思いをした。朝方、猛烈な爆撃を受けた。船隊は数艘あって、兵士の乗っている船と乗っていない護衛艦があったが、幸い乗っていた船の被害はなかった。

—シンガポールに着いた。そこは内地へ帰る兵士であふれていた。戦地へ赴く兵士は20人しかいなかった。「お前へはビルマ（現在ミャンマー）だから、一人で行け」という

ので、汽車に乗ってビルマへ行った。下車したら係りの兵隊が「マンダリンまで行く車がある。少し遠回りになるが乗れ」という。「外れたら死ぬぞ」と脅されながら、それに必死にしがみついて行った。連絡所に着くと、「ここからは徒歩だ。お前の荷物は預かる」というので、そこからは手ぶらでたった一人でテクシー（徒歩）だ。どんなところに行くかわからずに歩き始めた。あとひと山越えればインドというところで川を渡った。

- 内地から米を少しと、梅干を持ってきたのが救いだった。他に食べ物は何もないので、米を一回炊くと2日間もたせた。朝、わずかなご飯をふた口よく噛んで食べると、次はまた昼にふた口というようにしてもたせた。あるとき、おいしそうなきのこが生えていて、「これなら大丈夫だろう」とゆでて口に入れると、何かおかしい味がするので食べるのをやめた。あとで聞いたら、それを食べたら死んでいただろうといわれた。
- さらに進むと、下がってくる兵隊ばかりだ。負傷して歩けない者、中には「水くれ！」と叫ぶ者も何人かいたが、水をやると死ぬというのでやれなかった。ちょっと腰を降ろすと、尻が痛い。「何だろう」と思ってあたりを見回すと、白骨化した死体だらけだった。そんななかをたった一人で歩き続けた。
- やっと指定された師団司令部に着いた。シンガポールで下船してからずっとたった一人の行軍だったので、これが何よりもつらかった。師団司令部に着くと、獣医だから獣医部へ行けといわれた。行って見ると獣医部長が副官で、「お前、学校はどこだ」「東大の獣医です」「なんだ同学か」と、そんなところで先輩に出会うとは地獄で仏の思いだった。「お前、一人でわざわざ登って来たのか。下の方で待っていればよかったのに」という。そんなことを今さら言われても困る。「行き先はどこだ」「サンポだ」と答えると、「よしよかった」と隊長のところに相談にいった、行き先をビンボウ省に変更してくれた。「もうすぐ兵隊が来るから、それと一緒にいけ」という。もし、サンポへ行っていたら、そこから150メートルくらい下がるとそこがインパールだった。すんでのところインパールに行かずにすんだ。運が強かった。
- そこへ行くまでに3日かかった。その隊長が東京高等農林出のいい人だった。“戦地では位などどうでもいい、それより打ち解けなければ”と思っていたので、このめぐり合いは本当にありがたかった。中支（中国）から回ってきた5～6年の古参と合流した。現地に着いて、10日目には撤退作戦になった。大槻氏は殿（しんがり）をつとめた。元気のいい者が「お供します」と着いてきてくれた。弱った者は肩にかついで先に行かせた。
- 他の連隊は先に下りてしまっていて、気がつけば自分が一番後ろだった。道が曲がりくねったところまで来ると、イギリス軍がすぐ近くに見えた。向こうから手を振ってきた。世界で一番強いといわれた「ゴルカ兵」だ。装甲車も見えた。これが幸運なこといい人たちで、わずか50メートルくらいしか離れていなかったが、一発も撃ってこなかった。夕方になっても手でOKサインを出すと寄ってこなかった。4日間そこ

で対峙した。とうとう最後までイギリス軍は一発も撃ってこなかった。あの激しい戦闘のなかで、こんなことがあるなどと到底信じられない話だが、現実にあったことだ。

—終戦を聞いたのは、隣のバンコクに移ってからだ。ビルマから南下して、中国との国境まであと 500 メートルというところで、ビルマの一番下のタイに近い都市があるからそこに集合しろという命令がきた。そこまで降りるのに3日かかった。弱った人を助けながら殿をつとめた。そこで3人亡くなった。間に2つの川がある。舟艇をかついできた連中がいて、これで渡った。「もう後ろはいないな」とよく確認して渡った。元気なのは4人だけで、あとは病人ばかりだった。病人のうち2人は自殺した。ビルマの一番下のテツウンまで出て、そこで本隊と出会った。2日ほど遅れて着いたので、隊長は半ばあきらめていたところに着いたものだから、足を叩かれて「間違いなく生きているな」といわれた。命からがらたどりついた我々にとって、この言葉ほど安堵させられたものはなかった。本隊と一緒に、列車でバンコクまで帰ってきた。バンコクで敵から身を守るため矢来をつくっているときに終戦になった。ジャングルの中でなくてよかった。

—終戦ですぐに帰れると思ったら、そうはいかなかった。イギリス軍に矢来の中に抑留された。大槻氏が咳き込んでいると、隊長が医者に見てもらえというのでイギリスの軍医に診てもらった。医者と看護婦が何やら話しているがわからない。結核だというので入院になった。隊に戻ってわずかばかりの荷物を持ってくると、離れた建物に隔離された。先にもう一人入院している者がいて、大槻氏は二人目だった。隊長が驚いて見舞いにきた。隊にいるころは元気だったので、結核だなどとは思っても寄らなかった。隊長も気付かなかった。しかし、「イギリスの軍医が診断したのだから」と覚悟した。

—捕虜といってもイギリス軍は我々に1週間にいっぺん、芝居を見せてくれた。さすがに紳士の国だった。

—帰ってきたのは翌年の昭和 21 年 10 月 1 日だった。早いほうだった。病人扱いだったから横須賀から霞ヶ浦の療養所に送られた。ところが熱もなければ何の異常もない。ただ、結核と診断されているので、入院するしかなかった。ところが、その霞ヶ浦の療養所が混んできて、次が待っているというので大槻氏は除隊になった。家の者が引き取りにきてくれた。

—その後は農林省畜産局に復職任官することになった。以後、畜産試験場で長いこと勤務することになる。

9. 矢野氏の話

—昭和 13 年入学、18 年卒業

四中に入って卒業するまで何だかわからなかった。高等学校に入った頃になっようなことを考えるようになった。それまではいいとも悪いとも考えず、それが当たり

前だと思っていた。

- 全部“非常時”だった。生まれてから“平時”は一度もなかった。
- 4年で海軍經理学校を受けたが目が悪いということでハネられた。海軍經理学校を受けたのは徴兵で行くよりは最初からエリートコースに入るため。四中のエリートコースは軍隊だった。子供は何も考えなかった。
- 海軍經理学校をハネられて一高に入ってから何で戦争をするのかと考えた。
- 四中時代は遊んでいて難しいことは考えない。勝手なことやっていた。

漢文の大輝秀穂先生（「あわてる」と呼んでいた）の授業の中に白文という項目があった。罫だけ引いた白紙の綴じ込み帳に、勉強中の論語、孟子、十八史略などを白文のまま（返り点、句読点無しに）毛筆で写し書きして、それを教科書に講義を受ける授業である。従って、予習として講義時間の前までに内容を写し書きしておかなければ、白紙のまま、要するに教科書なしで講義を受けることになる。毛筆で数頁の漢字だけの文章を写書するなどそう楽ではない。ついサボりたくなる。講義を聞くだけならば教科書は白紙でもよい。時間は潰せる。しかし、生徒が文章を読まされるとなると、予習していかなかった者は大変である。何も出来ない。大槻氏も予習していかなかった方で、大輝先生にいじめられた。「じいさんが泣くぞ」とそればかりいわれた。大槻氏の祖父は国語辞書「言海」を編纂された言語学者大槻文彦氏で、その孫にあたる大槻氏を祖父の業績に照らしていびられたのである。そんな中、ある生徒は予習してこないのに「読め」と指されて、何も書いてない罫線だけの白文帳を広げ、「子曰、学びて時に是を習う。また楽しからずや。云々」と滔々と読み上げた。先生はそっと後ろから覗き込み、何も書いてない白紙を読み上げているのを見て、「勸進帳」と大声をあげられたと聞く。歌舞伎の「安宅の関」の富樫、弁慶の所作を振った師弟の遣り取り、四中の授業には固い反面、粋な面もあったのではある。と矢野氏は語る。

—当時の先生：

矢野氏が入学した昭和13年の校長は深井鑑一郎氏、同年深井氏は退官し、西浦泰治氏（白クマ）に代わった。5年生になって白澤清人校長。在学中に校長が3人、クラス担任が5年間で6人代わった。

矢野氏が1年生のとき富永喜舞子先生（おばあちゃん）という女性教員がいた。深井校長の親戚だった。国語を教えていた。富永先生は1年丙組担当専任だったので、他の組の人はあまり知らなかっただろう。夏に病気で退職され、その後に長谷川平次先生という園芸の先生に替わった。その先生に園芸を習って、家でヘチマをつくった。

—クラス担任は2年生が北野梅太郎先生（ネギ）（生物）、3年生が飯島善三郎（ゲーテ）（英語）、4年生が佐藤貫一先生（カニ）（国漢）だった。

—4年生の時に同じクラスに多湖輝がいた。その兄の1年下にエビ（海老見雄・昭15）という友達（剣道部員）がいた。ある剣道の練習試合の時、その兄と海老の二人がぶつかった。審判は佐藤貫一先生である。試合が始まり、佐藤先生が「つぎ、タコ（多

湖)、エビ(海老)」と二人を呼び出すと、途端に脇から「審判カニー」と声がかかったので一同どっと大笑した。厳しい時代でも、こんなユーモア精神も当時はあった。外からは、四中は“シチュウ”といわれ、死ぬほど勉強させられたといわれたが、そんなことはなかった。

- 5年生は森通(国漢)という先生だった。あだ名が“森ツー”。
- 大槻氏の頃はずっと深井鑑一郎校長だったので厳しかった。運動会もなかった。矢野氏が5年生のときはじめて運動会をやった。そのとき矢野氏は初めて「応援歌」を作った。安部幸明先生(音楽)に曲をつけてもらった。ところが、高橋先生(かたパン)に呼び出され、歌詞の中に「勝利の女神」と入れたのを“女神”は軟弱であると注意され、矢野氏はそのまま筐底に仕舞い込んだ。
- 5年生のときは回覧校内誌を発刊した。中心になったのは三木公久君だった。彼は後に受験雑誌の編集長になった。

10. 矢野氏の進学と終戦

- 昭和12年支那事変(日中戦争)勃発。昭和16年、5年生のときには大東亜戦争(太平洋戦争)が始まった。矢野氏の一高時代は3年の高校生活を2年で終える短縮授業だった。卒業実際の昭和18年には米軍の空襲の最中であつた。矢野氏は東大農学部農学科に入った。ところが、よく聞くと「農学科」には徴兵延期が効かないという。当時の制度で、理工科や医薬科の学生は大学卒業まで徴兵は原則的に延期された(これを「徴兵延期」という)。「それでは合格を断る」と、安倍能成一高校長のところに東大入学辞退のハンコをもらいに行った。当時は戦時の空襲下で大学の入試など行っている余裕はなく、大学入学も割当制で、いったん合格したら、それを取り消しの承認をもらわなければ他の大学へは願書提出さえ認められなかった。それで、徴兵延期の効く大学の二次募集に応じるためにそうした。学年最後の卒業試験の頃はカンニングまがいの動きも結構見過ごされていて、矢野氏は「こんなカンニングまがいをしているような試験を受けられるか」と白紙で提出した。赤点もらえば卒業できないだろうという魂胆もあつた。ところが、落第せず、東大に受かってしまった。仕方なく前述のように徴兵猶予を狙って、入学辞退の承認印をもらいにいった。すると「きみ、それを徴兵忌避というのだ」といわれたが、それでも添書を書いてくれて、東工大に空きがある(二次募集中)というのでそっちへ行った。もともと、後から考えれば入学した昭和20年8月には終戦になつたので、何もそんなに無理をしなくてもよかつたのだ。

11. 四中の学生生活

- 四中でも子供はけっこう抜け道を見つけていた。
- 軍国主義から民主主義と、極端に変化した。

- 四中と戸山は別物である。
- 四中のときは見張りがいて、カバンのかけかたをチェックしたとか、チョコは入れてくれないとかがあったと言う。
- 四中卒は勉強もさることながら、入り口のところからキチッとしろということを教わったのではないか。
- あれで人間になれたと言う人もあり、そうでない人もありだ。

12. 現在の戸山

- 先生が（都立の高校を）回っているのはよくない。
- 核になる先生は残っていてもほしい。
- 岩野由岐夫先生（大13）が城北会及び深井奨学財団に1,000万円の寄付をされた。

平成 15 年度 講演記録

「囲碁と日本文化——歴史が見える、未来が見える」平本弥星氏（昭 46）

日 時 平成 15 年 11 月 8 日（土） 場所 八幡会館
講師略歴 昭和 45 年第 6 回全国高校囲碁選手権団体戦で準優勝。
同年日本代表に選ばれ（3 人）韓国に遠征。
一橋大学社会学部に進学し、昭和 49 年学生本因坊。
昭和 52 年日本棋院入段（プロ試験に合格）、現在 6 段。
著書 「囲碁の知・入門編」集英社
「アマの負ける手、負けない手」日本棋院

「ヒカルの碁」が漫画でヒットしている。大人から子供まで、いま囲碁に対する関心が高まっている。過去の武将、政治家、作家と囲碁の関わりを調べると、日本の歴史が見えてくる。

川端康成は鎌倉幕府三代執権・北条泰時の末裔とかわいられている。それもあってか、晩年の川端は好んで鎌倉に住み、昭和 47(1972)年 4 月 16 日、逗子で自らの命を絶った。72 歳だった。

直木三十五が昭和 9 年に 43 歳で病没する前の 10 年間、川端は「直木氏の唯一の常習的棋友」であり、互先（ごせん・棋力がほぼ同じでハンデなし）であったという。

川端が呉清源（9 段、1914～）と初めて会ったのは、昭和 7 年 1 月の熱海であった。57 歳の 21 世本因坊・秀哉が呉清源と初めて対局した国民新聞社主催「本因坊名人・呉四段対局」を、直木に誘われて観戦に行ったときだった。来日して 4 年、17 歳の呉清源の対局姿を間近に見た川端は、「時々上目づかひに対局者をじろりと見る瞳のみだれた眼に、不敵な面魂を宿してはゐるが、その紅顔の美少年振りはそぞろ哀憐を誘ふものがある」と書いている。

川端が秀哉名人引退碁の観戦記を執筆しそれを小説化した『名人』は、川端自身お気に入りの作品だが、そこには次のような一節がある。

秀哉名人ときては瘦身短軀、額が迫り、頬骨は張り、口は尖り、いかにも貧相である。元来の造作は気品など先づ棄にたくもない顔と言ってよい。それが澄謐な高韻を發するに到ったのは、修練のたまものであることはいふまでもない。直木氏のいはゆる「碁は無価値なやうで、考えやうに依っては絶対価値がある」所以でもあろう。

また、川端は次のようにも書いている。

「私の知る限り、碁ほど精神を集中し、沈潜するわざはほかはない」と。さらに、「西洋に

もいろいろと勝負事は多からうが、碁はそれらと自ずから趣を異にし、心境を尚ぶ東洋精神が籠もっている」とも書いている。

囲碁は中国で誕生し、5世紀の書物には「手談」と記されている。言語や習俗の違いを超えて楽しめる囲碁は、古代から中国、朝鮮、日本で広まり、東アジアの共通文化となった。そして、碁は日本文化として発展する。

呉清源は13歳で来日したとき、すでに高段棋士に劣らぬ棋力に達していた。天才は1%の才能と、99%の努力によって生れる。呉少年は北京で、官吏の父が留学した日本から持ち帰った高手の棋譜に学んでいたのだ。重い打碁集を片手で持って毎日長い時間碁を並べたため、呉9段の手はいまも少し反り返っている。

囲碁は江戸時代に多大な発展を遂げた。戦乱の世を終局させた徳川家康が碁を好み、幕府が棋士の身分を保証したことが技芸の発展を支えた。太平の世に絢爛たる囲碁文化が開花した。勝負がすべてではない。高度な知性が凝縮している幾千の棋譜こそ日本文化の粋である。

◆投稿のお願い

今後の発行は、定期総会（例年11月）に合わせて年1回の発行を予定しています。皆様の投稿をお待ちしています。

学校時代の思い出、現在の仕事柄感じること、教育についての意見、趣味、随想等何でも結構です。

投稿は毎年9月末までをお願いします。

投稿は下記事務局まで、郵送、Eメールにてお願いいたします。

住所、氏名と四中・戸山の卒業年次のご記入をお願いします。

城北会千葉支部会誌 第1号

平成16(2004)年11月発行

発行：城北会千葉支部

支部長 齋藤 和子 (昭29)

委員 尾崎 英二 (昭31)

齋藤 徳浩 (昭32)

本橋 輝明 (昭34)

事務局：〒273-0042 船橋市前貝塚 270-25

本橋 輝明

電話 090-6021-7397

E-mail:mteruak@attglobal.net

インターネットの著者番号

→ 1954003

2004-11-01

